

山里の異変

旧額田町合併10年

市街地と連携不可欠

旧額田町では水道利用一ト当たり一円を水道料金に追加で徴収し、集まった基金を森林の保全事業に充てていた。だが、二〇〇六年の岡崎市との合併に伴い廃止された。

当時の町長だった鈴木啓允さん(モモ)は「基金を残せなかったのは心残り。山間地域の役割を知ってもらうためにも継続したかった」と悔やむ。当時の合併協議会の関係者によると、岡崎市は矢作川などの水も利用するため、徴収金を乙川上流域だけに使うのは矛盾するとの理由だった。

水環境を守るのは森林だけではない。山あいに田んぼが広がる市北部の下山地区。鈴木真清さん(モモ)は会社勤めをしながら週末に耕作している。

「米作は赤字になるくらい」。農協の米の買い取り価格は六十キロ当たり一万三千円ほど。トラクターやコンバインなどの機械は最低でも五百万円以上、機械の整備費や肥料代などもばかにならない。

③ 減り続ける農地



田んぼの荒廃を心配する下山地区の鈴木真清さん(右)ら＝岡崎市中伊町で

自力での作業をやめたくて、積は〇五年から一〇年まで、も、条件の悪い山奥の田んぼ 合併を挟んだ五年間で二割近く減った。下山地区の田んぼの面積は、耕作をやめれば雨水を保水



岡崎市で使われる水の約五割を供給する乙川。上流の山間地域で手入れのされない山や農地が増えれば、水の供給が不安定になったり、洪水が増えたりと市街地も無関係ではいられない。主に市中心部で活動するNPO法人岡崎まち育てセンター・りたの天野裕さん(四)は

できない荒地地となり、下流の洪水も懸念される。鈴木さん(モモ)は「この森を見学。『山の恩恵を受ける街の人が山の課題を知り、意識的に支援する仕組みをつくらなければ』と話す。二人は今後、地元の農産物の消費拡大や木材の販路を模索していく。唐沢さんは、補助金を投入して間伐された木材の大半が捨てられる現状を嘆く。『補助金頼みでは、いつまでも消費に結び付かない。山の産物が使われ、かつ支援になるのが理想』と全市民との連携に期待している。

×モモ 岡崎市の水道は自ら水源を持ち、取水や浄水、配水をする自己水源比率が78%と、30%前後の豊橋市や豊田市などと比べて高いのが特徴。岡崎市の水道水のうち、約半分を供給する男川浄水場では市東部の巴山近くから西に流れる乙川を水源河川としている。